



発行 浄土真宗本願寺派 稱讚寺
 〒112-0075
 東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号
 TEL 〇三―五二四二―二〇二五
 FAX 〇三―五二四二―二〇二六
 HP shousanji.com

やうやうさまざまの大小の聖人・
ぜんあく ぼんぶ 善悪の凡夫の、みづからが身をよし
 とおもふころをすて、身をたのみ
 ず、あしきころをかへりみず、ひ
ぐぼく ぼんぐ とこ げらい とすぢに具縛の凡愚・屠沽の下類、
むげこうぶつ ふかしぎ ほんがん 無碍光仏の不可思議の本願、
こうだいちえ みょうごう しんぎょう 広大智慧の名号を信樂すれば、
ぼんのう ぐそく 煩惱を具足しながら
むじょうだいねはん 無上大涅槃にいたるなり。
 『唯信鈔文意』

年末、たまたま「チコちゃんに叱られる」を見ていたら、「善玉・悪玉」の話題でした。

「善玉・悪玉」と聞くと、コレステロールか役者の役柄を思い浮かべるのですが、もともなかったのは、今年のNHKの大河ドラマ『べらぼう』の主人公・蔦屋重三郎が出版した『心学早染草』（山東京伝作・北尾政美画）に出てくる顔（左絵）が善・悪の挿絵漫画だそうです。

善魂（ぜんたましい）・悪魂（あくたましい）と呼ばれていたものが、善玉（ぜんだま）・悪玉（あくだま）となったそうです。

大河ドラマでも演出されるかもしれませんが、この『心学早染草』が出版された一七八八年当時の江戸の若者たちの間で、悪の提灯を掲げて、悪ふざけ・暴れ回ることが流行ったそうです。その様子を現代の「暴走族」とテレビでは解釈されていました。

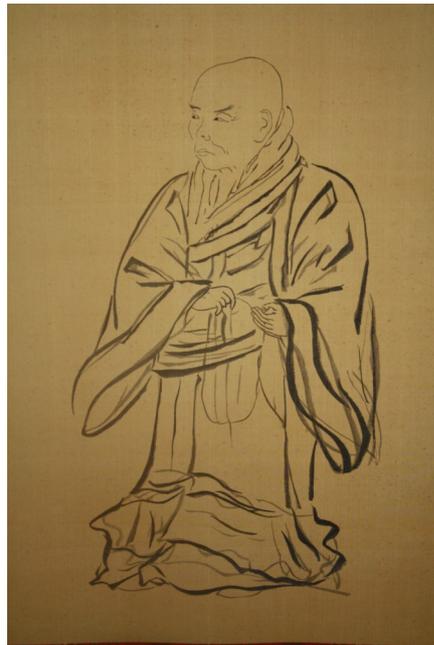
『心学早染草』は、倫理道徳を教えるものではありますが、その発信者の意図に反して？悪玉が想定外に大衆に受けてしまったようです。親鸞聖人が仰る「悪人」も聖人の意図とは当時からでも現在でも間違つて理解されているようです。

上記の「下類」とは「具縛」と一緒に「凡愚・屠沽」を挿んでおり、全ての衆生が「下類」となっていると思えます。「下類」とは「下品下生」を表わしており、「悪人」の元ではないかと思えます。が自分を「上品・中品」と思い込んでいるのも事実です。



稱讚寺

報恩講のご報告



日時 十二月二十二日(日)

日程

- 一一三〇 お齋
- 一一三〇 法要
- 一一三五 休憩
- 一一四〇 法話(住職予定)
- 一一五〇 茶話会
- 一一六〇 終了



足立光成さん・早崎光弘さん・中木原乃既子さん
山下陽子さん・高橋八重子さん・姉(北村智度子さん)

年末も押し迫る十二月二十二日、お忙しい中、ご参拝いただき、誠にありがとうございます。昨年、親鸞聖人がご誕生なされて八五〇年ということで、御本山で「親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要」が厳修されました。今年、親鸞聖人が50歳頃から『教行信証』を認められてから八〇〇年になります。四月には築地本願寺で、六月には東組(会所・永稱寺様)で、「親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要」が厳修されました。

親鸞聖人ご本人は、独自に宗派を打ち立てる気は毛頭ありませんでしたが、後世になつて、『教行信証』の著述をもつて、立教開宗と位置づけました

親鸞聖人は『教行信証』を80歳頃まで、書き直し書き加えなされたとのこと。『教行信証』をはじめ、数多くのお聖教をお書きになり、残してくださいました。

第三代門主・覚如上人の『報恩講式』には、親鸞聖人の讃嘆(報恩感謝)する理由として、「一つには真宗興行の徳を讃じ、二つには本願相應の徳を嘆じ、三つには滅後利益の徳を述べ。」とあります。

実際にお会いする事も出来ない、また、同じ時代にあつても、お会いできるかもわからないはずなのですが、いつの間にか、お念仏申し、阿弥陀さまのこと、ご本願を聞いており、親鸞聖人のことを知るようになっていた私たちが、親鸞聖人が多くのお書物を残されましたが、私たちの先人が受け継いで来られたからこそ、こうして私たちもお会い出来ているのでしよう。

親鸞聖人への報恩感謝の思いを抱くところに、必然として、親鸞聖人のお心に阿弥陀さまのご本願を味わうことになるのではないのでしょうか。

「南無阿弥陀仏」のお念仏に、ご本願の「生起本末」を聞いて参りたいと思います。

お念仏を申すのは、私の行ないではありませんが、修行の「行」ではなく、生業の「業」としてのお念仏は阿弥陀さまのご本願(恩徳)が成就した証(報)である「報恩の念仏」と承るところであります。

念仏と業道・念仏と行善

『歎異抄講話』瓜生津隆雄師著

念仏と行善

次に「念仏と行善」とは「念仏はまことに浄土に生まるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもつて存知せざるなり」「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしとよきひとの仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり」と述べられた一段の意趣を指すのであります。

ここに念仏の「浄土のたね」「地獄の業」と主張する考え方を打破して「浄土に生まるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもつて存知せざるなり」と言われているのは、当時における一般的通念として地獄、極楽とは勧善懲悪のためで、善いことをすれば極楽へ行く、悪いことをすれば地獄に堕ちる、これは悪に傾く人を教えて善を積ましめる方便のために地獄、極楽を説くのであるという考え方がありました。言葉を換えると、念仏の信仰を、道徳のお手伝いをするもののように考える考え方でもあります。もちろん、善悪応報は仏法の説くところでもありません。しかしそれは惑業の因果として多く説かれる真理であります。いま「本願の念仏」は、かかる惑業の因果を超えた、如来の因果において成就せられた法である。されば、その如来の法は勧善懲悪の因果の枠で律すべきものでない。「地獄におつべき業」「極楽に生まるるたね」と沙汰して、如来の大悲

を忘れて惑業の因果の枠に引き降ろす沙汰は念仏には制約せられた、行為に自由にならぬ三業が有道に對する越権の沙汰であつて、この親鸞のあずかり知らざるころである。念仏の道は如来の因果として聞き習ったころのものである。かえつて念仏を万善万行の総体として廃悪修善の定散心(自力心)の手で握るところに念仏の意義を誤る過失を招く。このことわりを明晰せられたるものが「浄土に生まるるたねにてやはんべるらん、地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもつて存知せざるなり」というお言葉でないでしょうか。道徳的業道の因果の心をもつて超因果の念仏をとらえてはならぬことを教えられているようであります。

念仏と業道

「たとひ法然聖人にすかされまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候。その故は、自余の行もはげみて仏になるべかりける身が、念仏をまうして地獄にもおちてきふらはばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もきふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」とある法語の精神は「いづれの行もおよびがたき身」の上に行なわれる「念仏」というものを明らかにせられたようであります。

いったい親鸞聖人が「いづれの行もおよびがたき身」と言われた反省には如何なる思想が働いているのでしよう。窃かに思うに、そこに宿業感というものがあふと思われまふ。宗祖の宿業感を明らかにするには、(一)異熟宿業と(二)業宿業といふことを考慮に入れるべきであります。 (一)異熟宿業とは異熟の果として受けたこの身はどうにもならぬということであり、(二)業宿業とは異熟の身

には制約せられた、行為に自由にならぬ三業があるということでありまふ。されば異熟宿業にせよ、業宿業にせよ、ともに決定的な、思いにまかせぬ不自由な制約を受けている心身であることを指すのであります。すなわち賢善精進の姿を示して精進の行をやつてみてもそれは異熟宿業・業宿業の身心にとつてはどうにもならぬものがある。それを「いづれの行もおよびがたき身」という体感としてあらわされたものでありまふ。この語はまた「愚身の信心」と言われた「愚身」とか「そくばくの業をもちける身」と言われた「身」にも通ずる考え方であります。「身」とは異熟の果体であります。

かくて、「自余の行をはげみて仏になるべかりける身」でなく「いづれの行もおよびがたき身」たる親鸞聖人は、それを宿業と感じ、その身を解脱せしむる道が「念仏」であつて、それを「念仏して弥陀にたすけられまゐらすべし」とよき人(法然聖人)のおほせをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり」と的示せられたものでありまふ。ここに聖人の意味が躍如としています。思うに「ただ念仏して」の「ただ」の二字を、従来多く、念仏に係わる副詞のごとく読まれていますが、静かにこの第二章を見ると「ただ」という副詞は、後の「信ずる」にかかるといふようであります。さればこのお言葉は唯信念仏「念仏をただ信ずる」―念仏往生の教えをただ信ずるほかに別の子細なき意味を表明せられたものとうかがえます。されば聖人の道は「念仏をただ信ずる」この念仏の一道よりほかに往生の道もなく、法門の要もなかつたものであります。極楽で助かるのでなく、それより更に適切に「念仏の救い」―念仏に遇える身―これが関東の同行に對して示された聖人の全信念であつたのでありまふ。

特集 金子大榮師のご領解 ㊦

『親鸞の人生観』

教行信証真仏弟子章

金子大榮 法蔵館 一九六六年初版

四 苦悩と安楽

本文 『無量寿如来会』にのたまはく、もしわれ成仏せんに、周徧十方無量無辺不可思議無等界の衆生のともがら、仏の威光をかふりて照触せらるるもの、身心安楽にして、人天に超過せん。もししからずば菩提をとらじ、と。已上

口語訳 『如来会』にいう。われ仏とならば、量りなく辺りなき世界の生きとし生けるもの、わが照らす光に触れば、身心の安楽なること、世の常ならざるものとなるであらう。しからずば覺の身とはなるまい。

一

『無量寿如来会』(菩提流支訳)は『大無量寿經』(康僧鑑訳)と梵本は同じものである。されども翻訳者が別であるために、意味は同じでありながら語感の異なるものが多い。それだけ相補いて領解を深くせしめられることである。それで『教行信証』では『大經』の意を助成するものとして、特に『如来会』を尊重してある。時には両經を一つにしてやえあるところがあるのである。

ここに引用されたものは『大經』の触光柔軟の願に相当するものである。「周徧十方無量無辺不可思議無等界の衆生のともがら」はすなわち『大經』の「十方無量不可思議の諸仏世界の衆生の類」である。その周徧十方とは十方に周徧していることであり、無等とは相等するものがないことで無数ということである。だからこれらの言葉の異同については問題はない。それで特に留意すべきは光明を威光とし身心柔軟が身心安楽となっていることであらう。されどそれも身心柔軟であれば自ずから身心安楽となつていくことであることは当然であり、そうあらしめる光明には威力があるということも領かれることである。とすればただその事を身にかけて、それ以上の思量は無用なることといわねばならない。親鸞のここもその他はないようである。

されど浄土は極樂の名で表わされているために往生しそうは功利的であると非難されているのである。聖教にもまた安樂浄土の名に執えられて受樂のために願生するものは往生することができぬと誠められている。しかるにここでは如来の願により身心安樂が恵まれると説かれてるのである。しからば凡夫の願い望む安樂と、如来に恵み与える安樂とは、性格的に別なるものであろうか。そこが我らに課せられた問題であるのである。

二

しかるに安樂の意味については聖教のいたるところに説かれている。その一つとして我らは曇鸞の三樂の説を聞くこととしよう。「樂に三種あり、一つには外樂、いはく五識所生の樂なり。二つには内樂、いはく初禪・二禪・三禪の意識所生の樂なり。

三つには法樂樂(ほうがくらく)、いはく智慧所生の樂なり。この智慧所生の樂は仏の功德を愛するより起れり」とある。ここに五識所生の樂というは感官を通して外から受けるものであるから、もつとも常識的のものである。一般凡夫の樂とするものである。また初禪・二禪・三禪の意識所生の樂とは、特別の行徳として説明を要するものであろうが、いずれ感覺的な快樂を停止して内部に禪(しず)かなる安らかさを持つものである。それは聖賢のたのしみであり、哲人の喜びであり、また芸道に満足するものの心境である。これらに対して法樂の樂がある。それは仏の功德を愛する聞法者の樂である。智慧の念仏の樂であり、真仏弟子の安樂である。

されど法樂の樂は内外の樂を拒むものではない。既に身心柔軟ならば五官の触れるところ、すべて苦患がないと説かれているのである。その安樂なる純粹感覺の世界こそ浄土といわれるものである。そうでなければ浄土の經説は了解することができない。したがって浄土はまた意識の内樂の満たされることであらう。「仏法味を愛樂し、禪三昧を食とす」と歌われたのは内樂でなくてはならない。それではじめて身心ともに安樂といえるであらう。そこで聖教の意を測れば法樂の樂あいてこそ、まことに内外の樂も成就するということであらねばならない。そこには内外の樂を見失えるものには、法樂の樂は与えられ、法樂の樂を得ることによりて、返つて見失われた内外の樂も取り戻せるということがあるようである。しかるに内外の樂を失うことは、すなわち苦悩として感ぜられるものである。したがってここには眞實の安樂は苦悩を機縁としてのみ感ぜられるという事実があるのである。いであらうか。

ここで私は端的に問題の中心に触れることとしよう。それは人間にとりての身心の苦悩とは誠意の破綻に他ならぬということである。

浄土の教は苦悩の衆生の救いとして興起した。しかしその苦悩とは、ただ生活が不安であるというに留まるものではない。善意の貫かれない悲痛である。夫人韋提希にとりては至誠のころでの行為が、返って受難せねばならないことになったという悲歎となったのであろう。されど釈尊の教に照らされてみれば、その誠意の底にも凡夫の深い我執があつたことを顧みねばならぬのであつた。人間苦が人間悪を知らしめるのである。その人間悪を照破する仏の威光でなくては、人間苦を除くことができない。ここには内外の樂を断念して、偏に悲願に恵まれる法樂を聞くよりほかないのである。

我らの道念は生活の破綻によりて打ち砕かれる。破綻は外から来るようであるが、打ち砕かれるものは内なる善心である。それに苦悩しないものは如来の悲願を信行することができぬのであろう。その苦悩こそ人間的なものである。人間の愚かさ、罪の深さ、力なき等は、全て苦悩において内感される。苦悩とは善心の力なき、愚かさ、虚偽顛倒の感覚である。それなければ、その苦悩はただ念仏せしめ、偏に如来の悲願を信受する機となるのである。したがってそこに与えられる法樂の樂は内外の樂を超えたものでありつつ、かえってまた内外の樂となるのであろう。この法樂こそ人間苦を機縁とするかぎりなき樂である。人と生まれ悲しみを知らないものは、人と生まれた喜びを知らない。その喜びは地下を流れる清水のごとく、苦悩に打ち砕かれたる底から湧き出するものようであ

る。

こうして私は仏教で苦悩というのは人間的のものであると領解した。それはただ生活の不安にのみ苦悩することは動物的であるというしその上に立つものである。したがって生活の安定だけを幸福とすることは、必ずしも人間的でないと思うているのである。されど人間の要求している安樂というも、結局は生活の満足の外ないものとすれば仏教で苦悩というものは、特に自覚によるものといわねばならぬであらう。したがって安樂もまた「人天に超過」するものである。それはまことに如来の威神の力でなくては感受されないものである。

四

私はここで線言となることを恥じず、身心安樂ということをごとくわけしてみたい。

身心は本より一如不二である。されど已に身心というかぎり、また別である面もあるのであろう。だから身は安らかであるが心は樂しからず、心は安らかであるが身は痛むということもあるのである。しかし心は身の「精」であり「神」であるから、その精神の安樂なくば身体の安樂も感知されぬことであらう。とすれば仏教に苦難というはつねに身の状態において説かれてはいるが、それは必ず心身の不安憂悩として感覺されているものであらねばならない。

この意味において地獄の苦というも精神的のものである。「いづれの行も及び難き身なれば」とても地獄は一定すみかぞかし」という表白には道念の破綻が悲しまれているのではないであらうか。強いもの勝(の畜生)も、欲望の満足をもみもとむる(餓鬼)も、それが人間生活の常態であると思つてい

るものには、苦難の悪道ではないであらう。

したがってそれらの人びとには、浄土の安樂は思慕されない。その安樂は彼岸的のものであるからである。

ここで「三塗苦難ながくとち 但有自然快樂音、このゆへ安樂と名づけたり、無極尊を歸命せよ」とある和讃を口誦んでみる。それは浄土の徳を讚嘆しているものではあるが、そのまま人間生活を懺悔しているのである。三塗(地獄・餓鬼・畜生)を苦難とするものは道念であるからである。

誠意をつくそうとするものが苦難によつて自覚せしめられる自我愛と、人間悪の感覺である。人間の悲しみには底がない。したがってその悲しみを攝取して融和してめぐまれる安樂もまたきわまりなきものである。その安樂にあらしめる威神の光、それこそは無極尊と呼ばれるべきものである。

五

これで安樂の性格も自ずから明らかとなった。それは言うまでもなく涅槃の境地である。涅槃第一樂と言われている。『教行信証』では『涅槃經』によりて、それを大涅槃の大樂として表わしてある。

その解説によれば大樂とは「諸樂を断つ」ものである。苦あれば樂あり、樂あれば苦ありという。その苦なくして樂のみを求むるものは凡夫である。諸仏の樂はその苦樂を超えたもの、すなわち無生法忍の境地である。だからそれは「不苦不樂」ということもできよう。

されど、その不苦不樂は、苦樂の感受性を失った病的のものではない。健全なる身心に内觀される寂かなる樂である。大樂はすなわち「大寂定」である。この寂かなる樂は、一切の事理を了知する智

慧によりて感得せられる。自然の現象、人間の愛憎等、すべてを了解することとなれば、求めず争わずにおこなうことができるであろう。

ここに「一切知」の大楽がある。一切知とは大いなることである。ながい眼である。そのところに受け入れ、その眼をもつて見れば自ずから寂靜となり安楽となる。その境地に達すれば、老・死にも破られない身となるであろう。というのが『大涅槃經』の説くところである。

これは、言うまでもなく未来の証として説かれているのである。されど、仏弟子の受くる安楽も、それと異質のものではないであろう。

かえって煩惱を断ぜずして感受せられるところに、深い喜びがあるのである。人間として受ける苦惱と念仏に恵まれる安楽とは交感せられて、生の喜びを深くするのである。そこに彼岸無生の安楽が現生の利益としてあらわれることの意味があるのである。

散りゆく花にかぎりなき生命を感じ、いまにもしれぬ身において名残を惜しむ懐かしさがつきない。すべては滅びゆくのみが正しく、滅びないものを思慕するは不正の見であろうか。「滅びの光」を懐かしむところには彼岸の無生が感ぜられているようである。「生死の苦海ほとりなし、久しく沈めるわれら」であると、身にしみて感ぜしめられるときにも、身心の安楽は恵まれているのである。まことにこれ仄かにして、しかも作ることもない深い喜びである。

『歴史道』Vol35 仏教の開祖 釈尊が説いた悟りと教え

世界中で約五億人もの信仰を集める仏教。その開祖である釈迦とはどのような人物だったのか。いかにして悟りを開き、そして何を弟子たちに「教え」たのか。釈迦の生涯を紐解き、原始仏教の成り立ちに迫る。(監修・文 渋谷申博)

王子の身分から修行者へ
弟子を得て王や富豪も信者に

仏教は「ブッダ(仏陀・如来、悟りを開いた者)になった釈迦の教え」と言った意味で、開祖とされる釈迦は実在した人物と考えられている。しかし、キリスト教の開祖であるイエスのように同時代の記録がないため、その具体的な人間像を再現するのは容易ではない。

唯一頼りになる史料は初期仏教の経典であるが、経典が文字に記されるようになったのは、釈迦の死から数百年経った後なので、どこまで歴史的事実に基づく記述であるのか見極めが難しい。釈迦が活動した時期さえはっきりしておらず、北方に伝わった仏教の伝承では紀元前463〜383年頃、南方仏教の伝承では紀元前624〜544年頃と言い、100年ほどの差がある。

しかし、多くの研究者による経典や遺物の分析により、その生涯については、おおよそのことがわかってきている。

まず、その名前であるが、釈迦(シャキヤ)は氏族名(シャキヤ族 釈迦族)であって、個人名ではない。釈迦牟尼と呼ばれることもあるが、これは「釈迦族の聖者」といった意味だ。

周知のようにインドは階級(カースト)社会であるが、釈迦族はバラモンに次ぐクシャトリア(武士)のカーストに属する。

では、開祖としての釈迦の名前は何かというと、ゴータマ・シッダールタ(シッダッタ)と言った。漢訳経典では瞿曇悉達多(くどんしつだつた)と音写されることもある。

シッダールタは釈迦族の王(シユッドーダナ、浄飯王(じょうぼんおう)の子として生まれた。王としてもその国は経典に出てくるマガダ(摩揭陀)国のような大国ではなく、コーサラ国に服属する小国で、その根拠地はネパールとインドの国境付近だったと考えられている。

誕生後間もなく母マヤー(摩耶夫人)を亡くしたシッダールタは、継母となった叔母に育てられた。また、内省的な息子が出家してしまうことを恐れた父は、様々な快樂を与えて引き留めようとしたともいう。しかし、妃との間に男子をもうけた後、密かに王宮を抜け出して修行の生活に入った。29歳の時のことであった。

経典は、王宮の四つの門で老人・病人・死人・出家者を見て、生きることの苦しみから逃れるには修行の道に入るしかないと感じたからとするが、家族を養って社会的責任を果たしたのちに出家するということ、インド古来の民俗習慣に従ったとも考えられる。

ただし、シッダールタの出家の動機が、生きることの苦しみからの解放のためであったことは、後の教えからみて間違いない。シッダールタはその解決を苦行に求めた。断食や呼吸を止めるなど、その行は過酷を究め、シッダールタはミイラのような姿になったという。

だが、苦行は一時的に苦を忘れさせることはできても、その覚ったシッダールタは娘が差し出した乳粥を飲んで体力を回復し、菩提樹のもとに座って苦そのものを明らかにする瞑想に入った。

そして、完全な智に達し、苦からの解放、解脱に至ったのであった。すなわち、シツダールタはブツダになったのである(以下、日本の伝統に基づきシツダールタのことを釈迦と呼ぶことにする)。

釈迦はまず、ともに修行をした5人の出家者に悟ったことを説いた。この5人は釈迦の最初の弟子となった。

当時のインドは各地で都市が発展しており、経済活動の活発化により浮遊な人びとが増えていた。彼らは知識欲が旺盛で、伝統的な信仰に対して批判的であった。仏教はこうした人びとに受け入れられ、休息に弟子や信者を増やしていった。

だが、釈迦も老いには勝てなかった。80歳になった釈迦は老衰と病に苦しみ、自らを古ぼけた荷車にたとえるほどであった。そして、来たるべき釈迦の死を嘆く弟子に「生じたものはいつかは壊れると教えたではないか」と諭し、クシナガラでその生涯を終えたと伝える。

「人は必ず死ぬ」ことを直視せよ！ 釈迦の教えの核心を解き明かす

現実を正しく観察し
それを正しく理解する智慧

釈迦は悟りを開いた時、その内容があまりに深遠であるため一般の人には理解できないと考え、教えを広めることをいったんは断念したという。だが、教えが失われることを惜しんだ梵天(バラモン教の神、ブラフマン)が説得をして、説法を決議させた、と経典は述べる。

確かに釈迦の悟りを完全に理解することは容易

ではない。しかし、その教えの根幹は案外簡単なことだ。すなわち、「生存に伴う苦を取り除くには、この世を正しく観察し、それを正しく理解する智慧が必要」というものだ。

この考えは、王宮に暮らしていた時に抱いた悩み、「人生は苦だ。なぜならば老いや病氣、怒り、悲しみ、渴望といった苦悩に満ちており、いつかは死なねばならないからだ」を徹底的に考察した末に得たものであった。

釈迦は言う。「すべてのものは原因と結果の連鎖によって成り立っており、永続的なものは何一つない。それにもかかわらず物や人、身分などに執着し、それを失うことを恐れ、無くしたことを悲しむ」「どんなものもいつかは壊れる。自身の命も終る時が来る。それなのに、それらがいつまでも自分のもんとしておこうとするため苦しむのだ」と。

こうした考えを簡潔にまとめたものを四聖諦(四諦)という。四つの真理といった意味で、悟りを得ない人生は苦だという苦聖諦、苦の根本原因は果てしない欲望を生み出す渴愛にあるという集諦(じっしやうたい)、渴愛を滅して苦から脱するといふ滅聖諦、渴愛を滅して苦から脱するには八正道などの方法があることをいう道聖諦よりなる。

道聖諦という八正道は八つの正しい実践的道徳といった意味で、正しい見解をもつ正見、正しく思惟する正思、正しい言葉を使う正語、正しい行ないをする正業、正しい生活を送る正命、正しい努力をする正精進、正しく思念する正念、正しく瞑想する正定からなる。

八正道を実践するだけで悟りが得られるのか、と思われたかもしれない。確かに八正道を完璧に行うことができたとしても、それだけで悟りを得ることはできない。だが、八正道の実践なくして悟

りの実現はない。

当時のインドには釈迦以外にもブツダになったと称する修行者がおり、そうした者の中には苦行や瞑想で悟りに至れると説く者もいた。だが、釈迦が自ら実践して明らかにしたように、ただ苦行や瞑想をするだけでは悟りには至れない。まず、正邪を見極め、物事を正しく判断することができるよう心を整えなければならぬ。釈迦はこうした修行法を戒定慧(三学)としても説いている。戒律を守った正しい生活の中で、正しく世を観察する瞑想(定)を行って、正しい智慧(慧)を得るということだ。そうすれば、万物が原因(因)と結果(果)の連鎖で成り立っており、永遠に不変なものなどないことがわかるだろう。そして、そのようなものに執着する愚かさもわかるはずだ、と釈迦は説く。

釈迦はまた、八正道や戒定慧によって正しい智慧を得ない者が苦に至るシステムを十二支縁起として説明している。このシステムは同時に、智慧による無明(無智)の解消によって苦を生滅させる課程を示すものでもある。

では、釈迦はこうした教えを弟子たちにどう説いたのであろうか。経典は数多くの弟子に囲まれた釈迦が説法する場面から始まるものが多いが、必ずしもそういうことばかりではなかったようだ。

というのは、釈迦は相手の性格や才能に応じて教えを説いたときれるからだ。また、今一番悩んでいるのを糸口にして、相手を真理に向き合うように導いた。

後世、さまざま種類の経典が生まれたのも、こうした教え方に由来するのかもしれない。

個性豊かな弟子たちと
拡大していく仏教教団

先に述べたように、釈迦の最初の弟子は、かつての修行仲間の5人の出家者であった。その後、弟子や在家信者は雪だるま式に増えていった。

ヴァーラーナシー(ベナレス)を訪れた際にはヤサという豪商の息子を弟子としたが、これをきっかけにその友人たち(50人いたという)も信者になったという。

マガダ国の首都ラージャグリハ(王舎城)では最大の後継者を得た。マガダ国の王ビンピサーラである。王は釈迦に竹林精舎と呼ばれる僧院も布施している。

ラージャグリハでは火の神を崇拜していた教団の教主の息子3人も弟子としており、その際、3兄弟は自分たちの弟子千人も連れて来たと言われる。また、ラージャグリハでは十大弟子に数えられることになるシャーリプトラ(舍利弗)・マウドガリヤーヤーナ(目連)・マハーカーシヤパ(摩訶迦葉)も弟子としており、シャーリプトラは250人の弟子を引き連れてきたという。

古郷のカピラヴァスツにも訪れ、息子のラーフラ(羅睺羅)や従兄弟のアーナンダ(阿難陀)などを弟子にしている。弟子が増えてくると、有力な弟子を布教に赴かせるようにもなっていた。こうして仏教教団は大きな組織に発展していったが、それを支えていたのが在家信者たちであった。

それというのも出家者は戒律により経済活動が禁じられていたため、日々の食事を得るのも、居住する場所を確保するのも、在家信者の寄進や協力が必要だったからだ。家々を回って托鉢をするのもこうした必要性による。

したがって、仏教が都市の富裕層に受け入れられたということは、その発展の上で大きなことであっ

た。彼らは競って釈迦に寄進を行って功德を積もうとした。コーサラ国の首都シラーヴァステイー(舎衛城)に住んでいた富豪のスタツタ長者は、私財をなげうって王子が所有していた庭園を買い取り、釈迦に寄進した。これが『平家物語』でも語られている祇園精舎である。

教団が大きくなったこともあって、釈迦は教団の運営や弟子の指導などを有力な弟子に任せようになっていった。その中でもとくに頼りとされたのがシャーリプトラであった。

シャーリプトラはもともとサンジヤヤという懷疑論者の弟子で、その代理も務めていたこともあって釈迦の教えをよく理解し、時には釈迦に代わって説法をすることもあったという。そのため経典にもよく登場する。『般若心経』で「舍利子」と呼ばれているのもシャーリプトラのことだ。しかし、釈迦より年上だったこともあって、釈迦が在世中に亡くなってしまった。

シャーリプトラに代わって仏弟子を指導したのがマハーカーシヤパであった。禅宗では禅の奥義は釈迦からマハーカーシヤパに伝えられたとして、特に重視している。また、アーナンダは常に釈迦のそばに仕えて身の回りの世話をしたとされ、最期の時も看取っている。このためもつとも教えを聞いた者とされる。経典は「私はこのように聞いています(如是我聞)」という言葉で始まるものが多いが、この「私(我)」はアーナンダのことという。また、釈迦の臨終の場にも付き添い、「自灯明・法灯明」の教えを授かったともいう。

こうした代表的な高弟たちは十大弟子と呼ばれることもある。しかし、そのメンバーが確定するのは大乘仏教の時代に入ってからのことだ。また、羅漢(阿羅漢)と呼ばれる高弟もいたとき

れる。

もともと羅漢は阿羅漢果という、もうこれ以上学ぶ必要がない境地に至った者を指す言葉であったが、超人的な神通力を持つに至った釈迦の高弟をいうようになった。中国では神仙思想と結合して仙人のような羅漢像が作られた。禅宗では禅僧の理想ともされ、十六羅漢、十八羅漢、五百羅漢像が寺に安置された。

編集後記(愚案) お知らせとお詫び

稱讚寺(前身 足立布教所)開所以来、22年間続けて参りました当寺報『稱讚』は、10日程遅れて発送することもありました。毎月発行いたしまして、今号で「265号」になり、約200通、毎月、発送して参りました。今年になって、以前からの宅配業者のメール便が廃止され、郵便に変更されたこともあり、ここ数回にわたり、150通まで減らしてきました。

しかし、更なる郵便料金の高騰により、残念ながら限定して発送することに致しました。中には、こちらから一方的にお送りして、ご迷惑なされておられた方もおられたかと存じあげますが、また一方的に発送しないことを決断いたしましたことを、ここに深くお詫び申しあげます。

当号は『本願寺新報元日号』と『2025年法語カレンダー』を同封します。

次号より一部発送に止め、『築地本願寺新報』も併せて発送いたします。ご了承ください。

尚、『稱讚』の作成は、毎月続けて参る所存ですので、お読みいただく場合には、稱讚寺ホームページ(<https://shousanji.com>)をご覧ください。

長い間の寛容、ありがとうございます。ありがとうございました。